

# 世界内存在と「色彩」の現象学

——ハイデガーとメルロ＝ポンティの比較研究へ向けて——

譽田大介

メルロ＝ポンティとハイデガーは近くて遠い二人の哲学者である。我々は両者の比較研究にあたっては、一方の議論を他方に回収してしまうことなく、また両者を補完関係に置くことでまとまりのいい議論を捻出するのでもなく、両者の近接における隔たりという緊張を含んだこの動向それ自身から哲学的問題をすくい取らなくてはならないと考えている。この課題は様々な観点からなされうるだろう。本稿はメルロ＝ポンティの「色彩」の現象学に着目しつつこの課題の一部を遂行することを試みる。

周知のとおり『知覚の現象学』でのメルロ＝ポンティは、人間を「世界内存在」として捉えた『存在と時間』におけるハイデガーの態度を受け継いでいる。この点、両者の立脚点は大枠で近接していると言ってよい。しかし前者にあっては、少なくとも『存在と時間』におけるハイデガーによって度外視されていた「色彩」という現象をめぐる考察が「世界内存在」という問題系の中に折り込まれている。つまり我々は、メルロ＝ポンティの「色彩」の現象学において両者の隔たりが生じている現場を見て取ることができる。

以上のような概観を踏まえて検討すべき問題は大きく二つある。第一に「世界内存在」という問題系に「色彩」という現象を取り込むことによって、ハイデガーに端を発する「世界内存在」をめぐる議論は、どのように展開、変化ないしは拡張したのかという点である。第二に、この拡張——つまり、両者の接近と隔たり——から、我々が哲学的に有意義などのような問題を新たに立てうるかという問いである。

議論の出発点として我々が注目するのは、『知覚の現象学』における次の三つの見解である。第一に、「色彩」は「運動的意味 la signification motrice」を持つという見解 (PP, 254)、第二に、その意味が理解されるのは、「運動性 la motricité」が「それぞれの瞬間に私の大きさの諸基準、私の世界内存在の変動可能な振幅 l'amplitude を打ち立てる機能となる」(PP, 254) 場合のみであるという見解、そして第三に「感覚の主体」は、「ある種の実存の場 un certain milieu d'existence に、その場と共に - 生まれ co-naît、あるいはその場と共時化されている se synchroniser ある能力 une puissance である」(PP, 256) とする見解である。

「運動的意味」とは身体のあるタイプの行為 (PP, 256) を呼び起こす。人間の「行為」を現象学的存在論の出発点とする点ではハイデガーと軌を一にするメルロ＝ポンティは、「行為」を上記のような「運動的意味」から捉える。この点、有意義性連関における行為を第一次的なものとして捉えたハイデガーとの相違が見られる。そして「振幅」という観点はハイデガーの実存論的分析論にはない新しい機軸をもたらしている。メルロ＝ポンティは「赤は、我々のまなざしが追い従い、また一つに結ばれる組成 texture を通して、すでに我々の運動的存在の拡張 l'amplification である」(PP, P256) と述べる。これら二つの点は、「世界」との「共時化」という問題において先鋭化する。この「共時化」において実存は世界と共に、いわば「生まれ続ける」のであり、このような見方を通して、「死」への先駆という現象から人間の実存をその「本来性」へと導くハイデガーとは異なる問題圏を開く可能性が示されている。『知覚の現象学』におけるメルロ＝ポンティは、ハイデガーの「本来性」という概念に批判

的な態度を示しつつ、我々は決定的な仕方では「現在」から離反することはできないと主張している（PP,490）。これは人間の実存の「非本来性」の権利を主張したものと読みうるだろうか。そう考えるとすれば、我々はメルロ＝ポンティが開こうとしている独特の問題域を再びハイデガーの図式を用いて裁断してしまうことになるだろう。「ひと das Man」は、常に「本来性」へと差し向けられているからこそ、非本来的でもありうるとハイデガーは考える。この論法がメルロ＝ポンティの「色彩」の現象学を通して語られる「世界内存在」にもそのままあてはまるだろうか。「共時化」という「現在」から語られる「世界内存在」ないしはその「変動可能な振幅」は、「決断」や「覚悟性」といった、存在することへの逃れられない切迫からの解除、あるいは少なくとも猶予の可能性を秘めていると思われる。本稿において我々は、メルロ＝ポンティとハイデガーの近接と隔たりという動向を以上のように議論を展開させつつ詳述するつもりである。